福島県立博物館紀要　第32号　2018年３月　p. 63－82

研究ノート

江戸時代交通路からみた南奥州の諸藩配置の意味
－南奥州における幕府支配体制確立期における丹羽家の役割－

荒木　隆*

１　はじめに

平成28年は福島県文化財センター白河館が開館して15周年を迎えた年であり、開館記念事業として指定文化財展「城跡の考古学」が開催された。この展示に関連して県内の城郭調査成果を基にした２回のシンポジウムが企画され、平成28年12月３～４日には「城跡を掘るⅡ　近世城郭の展開」と題した第２回シンポジウムが開催された。

このシンポジウムでは、県内の近世城郭の中から二本松城（二本松市）、小峰城（白河市）、棚倉城（棚倉町）及び三春城（三春町）を取り上げ、これまでの調査から見えてきた城跡の特徴と城郭史の中での位置付けなどについて総括が行われた。

シンポジウムの討論を通して、各城郭の遺構の特徴や変遷、街道・城下町との関係などについて整理と評価が行われた。

筆者は近年、古代の推定交通路と官衙遺跡をはじめとした各種遺跡の配置状況から陸奥南部（福島県地域）の地域的特性について検討を行っているが、近世においても同様に交通路との関係から南奥州の特性が明らかにできるのではないかと考えていた。

このシンポジウムでは、城とその傍を通る街道の位置関係や城下町の形成という観点で議論がなされていたが、各主要街道と城の配置、さらに諸藩・幕府領の配置の意味などについては、時間の関係であまり議論が深められなかったように思える。

そこで、今回は先のシンポジウムの成果をもとに、日ごろ検討を加えていた近世南奥州の諸藩の配置状況、特に主要街道と城の配置状況の関連性から江戸幕府の南奥州支配戦略の背景について考えてみたい。

さらに、幕藩体制確立期である３代将軍家光の段階、特に寛永期に福島県中通り地方を大規模な城下整備を行いながら駆け上っていった丹羽長重・光重親子の事跡を対象にして、南奥州における江戸幕府支配戦略の中で、これまで評価されている以上に重要な役割を果たしたと考えられる丹羽家の役割について考えてみたい。

これら２点に関する検討を通じて、江戸時代の南奥州が東日本全体を支配していく上で重要な役割を果たした地域であったことを明らかにしていきたい。

２　南奥州における交通路の概要

現在の福島県域にあたる南奥州は、古代の東山道や東海道石城延長路に代表されるように東北北部と関東以西を結ぶ南北の主要交通路が走る地域である。江戸時代にも、当時の政権中枢部の江戸と東北北部を繋ぐ街道が浜通り・中通り・会津の３地方それぞれに南北に走っており、いずれも当時の東北地方を支える交通の大動脈であった。

これらの３ルートは、現在も国道６号線（浜通り地方）、国道４号線（中通り地方）、国道121号線（会津地方）という各地域の主要幹線道路として踏襲されている。

さらに、それぞれの主要街道は東西に向かう山越えの街道により接続されていた。南奥州では、３地方を南北に走る主要街道を基軸にしながら、奥羽山脈と阿武隈高地を越えてそれらの南北に走る主要街道を東西に結ぶ脇街道により、交通路が網目状に結び付けられていたことがわかっている。（図１）

以下では、まず県内３地方ごとに当時の主要街道の概要についてふりかえる。

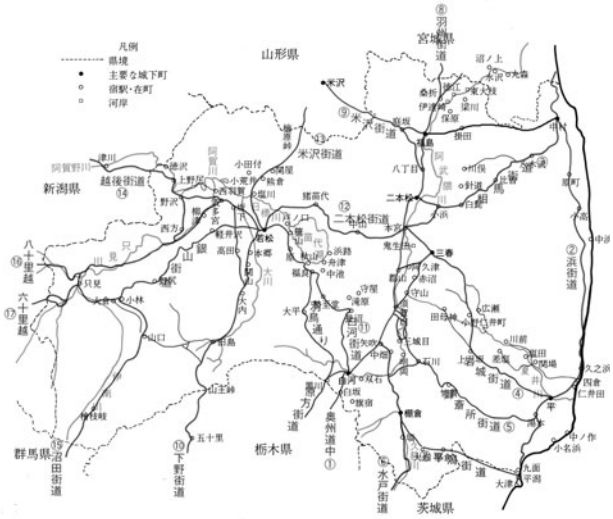

図１　近世における南奥州の交通路網

*福島県立博物館

図2　浜通り地方における街道の分岐点

⑴浜通り地方

江戸を基点として太平洋沿岸を北上する陸前浜街道は古代の東海道及び東海道石城延長路を踏襲する街道である。南の茨城県域から福島県域に入り、太平洋岸に沿って北上し、阿武隈川河口を越えた岩沼宿（宮城県）で奥州道中と合流する。（図２）

この南北に走る陸前浜街道からは、阿武隈高地を越えて奥州道中に接続する脇街道が要所ごとに分岐している。現在の福島県域周辺の脇街道は南から、平潟（茨城県北茨城市）から棚倉に至る平潟街道、湯本から石川を経由して白河に至る御斎所街道（石川街道）、いわき平から三春を経由して二本松に至る岩城街道、原町から飯舘を経由して本宮・二本松に至る相馬街道、相馬中村から霊山を経由して福島に至る中村街道などがあげられる。

それぞれの脇街道は浜通り地方と中通り地方の各藩を繋ぐ交通路として主要な物流路線となっており、阿武隈高地越えの脇街道が主要街道を密接に連結していたことがわかる。

⑵中通り地方

江戸を基点として内陸部を北へ向かって北上する奥州道中も古代の東山道を踏襲する街道である。南の栃木県域から福島県域に入り、阿武隈川に沿って北上し、阿武隈川河口を越えた岩沼宿（宮城県）で浜通り地方を南北に貫く陸前浜街道と合流する（図３）。

この中通りを南北に貫く奥州道中には、先に見た陸前浜街道から分岐する脇街道が合流するとともに、さらに会津地方へ奥羽山脈を越えて延びる脇街道がいくつか分岐している。奥州道中を中心に東西に肋骨のような形で脇街道が分岐し、奥州道中が各地域の交通の十字路として重要な役割を果たしていたことがわかる。

現在の福島県域周辺の脇街道をみると、県域の南に位置する白河が奥州道中と脇街道が集中的に交差する物流の一大拠点であったことがわかる。白河を起点とした脇街道は、棚倉を経由して水戸に向かう水戸街道、棚倉を経由して平潟（茨城県）に向かう平潟街道、石川を経由していわき湯本・平に向かう石川街道（御斎所街道）、長沼・湖南を経由して会津に向かう会津街道（白河街道）の４街道が白河城下から分岐している。奥州道中から分岐して阿武隈高地を越えるこれらの脇街道はいずれも陸前浜街道

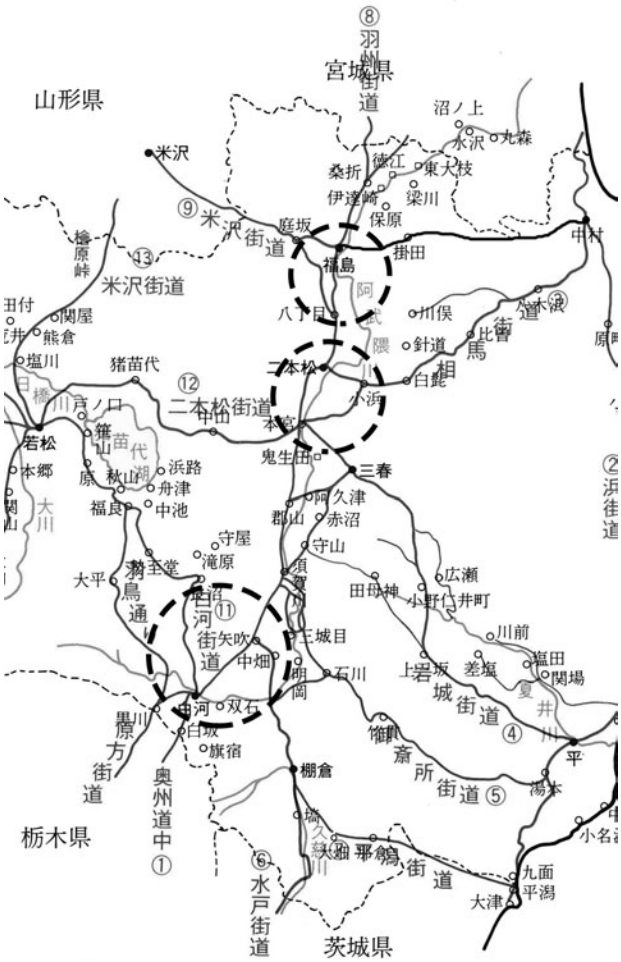

図３　中通り地方における街道の分岐点

に接続するものであるが、このような状況は二本松城下においてもみえる。

二本松を基点とする３つの脇街道のうち三春を経由していわき平に至る岩城街道、本宮・飯舘を経由して原町に至る相馬街道は阿武隈高地を越えて浜通り地方の陸前浜街道に接続している。残る一つは本宮・猪苗代を経由して会津に至る会津街道で、やはり会津地方を南北に貫く街道に若松城下で接続している。

さらに、福島城下周辺でも霊山を経由して相馬中村に至る中村街道によって陸前浜街道に接続している。奥羽山脈を越える脇街道は、庭坂を経由して米沢に至る米沢街道、桑折を経由して米沢に至る羽州街道の二つの脇街道がある。県北地方の福島と米沢は複数の脇街道によって連結されており、両地域が密接に結びついていたことがわかる。

以上のように中通り地方では、南から白河、二本松、福島の３地域が東西南北交通路の中継点として十字路を形成しており、浜通り地方、中通り地方を繋ぐ重要な交通・物流の拠点であったことがわかる。

⑶会津地方

会津地方は、古代において五機七道の制度に基づく主要街道が通っていなかった地域であったが、東山道沿線地域と強い行政的つながりを持つ地域として認識されていることが、奈良時代初めの養老２年（718）石背国建国の際の領域区分や、会津郡兵士が安積団に所属していたことがわかる多賀城跡出土木簡などから推定できる。会津は北陸道と東山道の接続を考えた場合、両者をつなぐ重要な中継地点

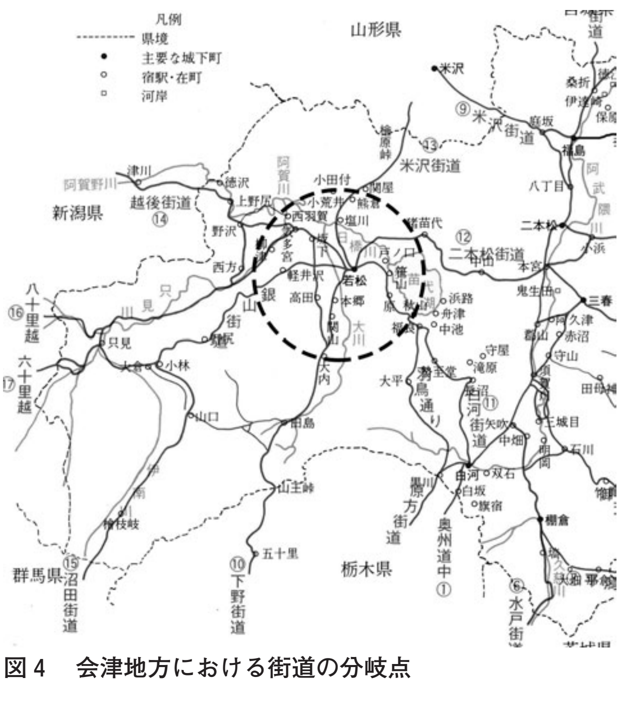

図４　会津地方における街道の分岐点

であったと考えられる。

江戸時代にも直接江戸に向かう１本の街道としての名称はないが、複数の街道が連結して江戸まで通じており、会津地方も江戸から東北北部へ向かう大きな街道が通過する地域として認識することができる。

江戸を基点として宇都宮を経由し日光へ向かう日光街道は将軍が東照宮参拝に利用することで知られる街道であるが、途中の今市からは下野街道（会津西街道）が分岐し、北の若松に向かって延びている。会津西街道は、若松城下大町四つ角で他のいくつかの脇街道と合流する。その中でも塩川・北塩原を経由して米沢に至る米沢街道は若松城下から唯一北上して米沢城下とを結ぶ道である。若松城下から延びる他の脇街道は東西に延びるもので、東方面には猪苗代・本宮を経由して二本松城下に至る二本松街道、西には会津坂下・西会津を経由して新潟に至る越後街道、会津坂下から分岐して只見川に沿い只見から伊南川沿いに群馬に延びる沼田街道などがある。また、只見から新潟三条方面は、さらに六十里越え・八十里越えなどの山越えの道もあり、新潟方面への交通路の複線化が図られている。

会津地方においても、日光街道・下野街道・米沢街道という江戸から東北北部へ向かう街道を連結させた南北軸の主要街道から、若松城下で東西の脇街道である二本松街道や越後街道などが分岐する交通網をみることができる。

会津地方を縦断する南北の街道は、明治時代に県令三島通庸により会津三方道路として大規模な整備が計画されたが、結果的には整備を行う機会を逸してしまい、鉄道網の整備も遅れたため、浜通り・中通り地方と比べ、南北軸の主要交通路として強く意識されないが、江戸時代にはこの南北方面の街道も物流の大きな動脈として機能していたことがわかる。

若松城下は北陸と本県中通り・浜通り地方という東西方向の交通路、さらに北関東から米沢を経由して東北北部へつながる交通路の十字路として重要な役割を果たしていたことがわかる。

⑷奥州南部の交通路にみる特性

上記のように、本県３地方の江戸時代における道路交通網をみると、３地方ともに江戸を基点として東北北部に向かう主要街道（奥州道中、陸前浜街道、日光街道＋下野街道＋米沢街道）が通り、その南北に並走する三つの主要街道を東西方向に接続させる脇街道を整備し、太平洋から日本海までを貫く交通網を整備している。その意味では、福島県域が、江戸、北東北、太平洋、日本海の四つを結ぶ大きな十

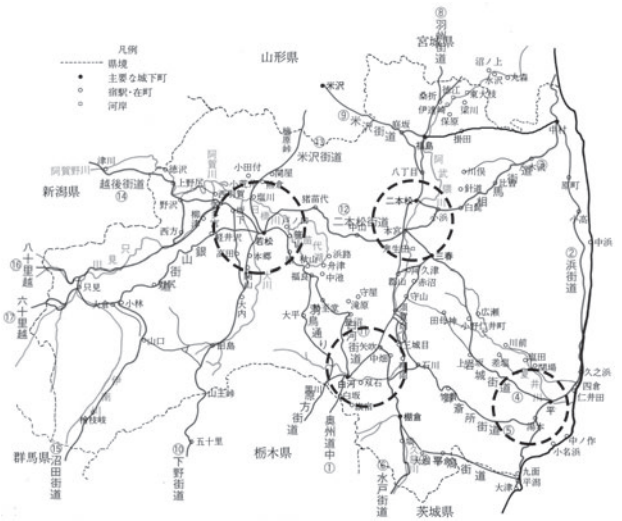

図５　南奥州における陸上交通路の要衝

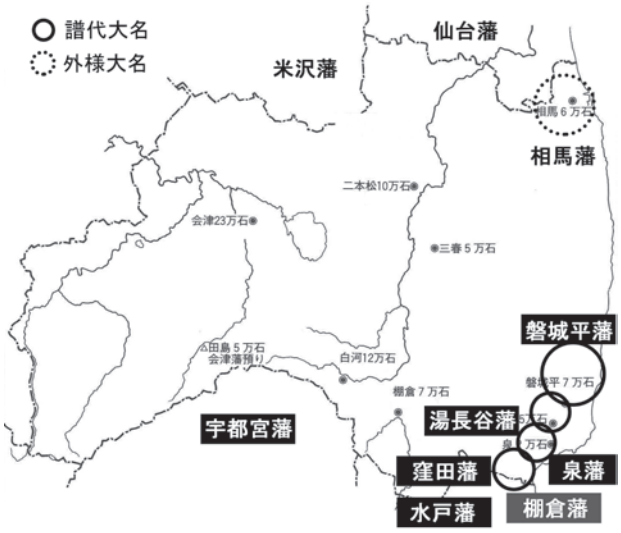

図６　浜通り地方における諸藩の配置

字路の役割を果たした地域として認識されていたことがわかる。

中通り地方の南北に二本松と白河という２大拠点を整備し、太平洋側のいわき平と日本海側に通じる若松を東西の脇街道で接続するダイヤモンド形の複線型交通ネットワーク体系が意図されていたと考えられる。

これらの４地域は南奥州の交通・物流を考えた場合、最重要拠点と位置付けられる地域であることが、交通路の整備状況からうかがえる。

３　南奥州における諸藩の配置状況

江戸時代の藩の配置は、その時点における政治状況や幕府の政策判断によって時間の経過とともに変化しており、一定ではない。特に南奥州の福島県域は、国内の他地域と比べると中小藩が並立する傾向が強く、南奥州の特徴の一つともいえる。

このような状況は、おそらく江戸幕府による東北経営政策、さらに在地の地理的要因を含めた地域的特性などが反映される形で形成されたものと考えられる。

今回は、江戸幕府の東北経営方針（外様大名対策）が各種政策に強く反映されたと考えられる幕藩体制確立期（関が原合戦後～寛永年間）を対象に検討してみたい。

⑴浜通り地方

本県周辺部も含めた浜通り地方の藩配置をみると、茨城県北茨木市平潟より南の地域は水戸藩の領地であり、それ以北が本県域と深い結びつきを持っていた地域となる。

平潟は棚倉藩の外港として支配された地域で、内陸部を中心にした棚倉藩が海岸部まで領地を張り出す形になっている。その北には窪田藩（勿来）、泉藩（泉）、湯長谷藩（湯本）、磐城平藩（平～富岡）、相馬藩（大熊～相馬）、仙台藩（新地以北）が配置されている（図６）。

磐城平藩は譜代大名の領地として浜通り地方の中核に位置する場所で、そこから分割独立した湯長谷・泉藩もそれを支える同様な役割を果たした地域である。

窪田藩も磐城平藩主内藤政長の娘婿で２代将軍秀忠の小姓を勤めた土方雄重により立藩された譜代大名の地である。

さらに、平潟の外港を管轄する棚倉藩も江戸前期の一部を除いて譜代大名の配置先として位置付けられる藩であり、周辺に配置されている譜代大名家及び南に位置する親藩の水戸家を支援する役割を果たしていたと考えることができる。

このように水戸藩以北の浜通り地方南部は中小譜

図７　陸前浜街道沿いの大名配置

代大名連合の地として、幕府の威光が色濃く反映された地域とみることができる。

一方、その北に位置する相馬藩以北は外様大名の領地となるが、隣り合う相馬氏（相馬藩）と伊達氏（仙台藩）は中世以来、ライバル関係にある家柄であり、まさに敵対する外様大名を隣接させることによってパワーバランスを保たせる江戸幕府の意図がうかがえる。しかもこの大名配置は、仙台を本拠地とする伊達氏と敵対関係にある相馬氏を奥州南部の中小譜代大名連合との間に配置することにより、敵対外様大名－譜代大名連合－親藩という３段構えの防衛ラインを構築しており、伊達氏を効果的に牽制するものとなっている。江戸幕府の対伊達氏政策の意図が反映された大名配置といえる。

江戸から浜通り地方にかけての大名配置をみると、将軍家のお膝元の江戸周辺は幕府領とし、そのすぐ北には譜代大名を集中的に配置している。御三家である水戸藩を挟んで、更に北にも中小譜代大名を集中配置し、その北には外様大名の領地が広がるという図式（図７）になっている。

太平洋沿岸地域は、江戸を中心として将軍家－譜代大名連合（水戸以南）－親藩（水戸家）－中小譜代大名連合－外様大名（敵対する外様大名１）－外様大名（敵対する外様大名2）の６層構造としてとらえられる。御三家である水戸家は奥州外様大名との最前線である中小譜代大名連合地域から一歩内側（江戸側）に引いた場所に位置し、最前線の前線司令部的な存在として配置されたと考えることができる。浜通り地方の大名配置はまさに、江戸幕府の対伊達シフトの大名配置政策が具現化された形としてとらえることができる。

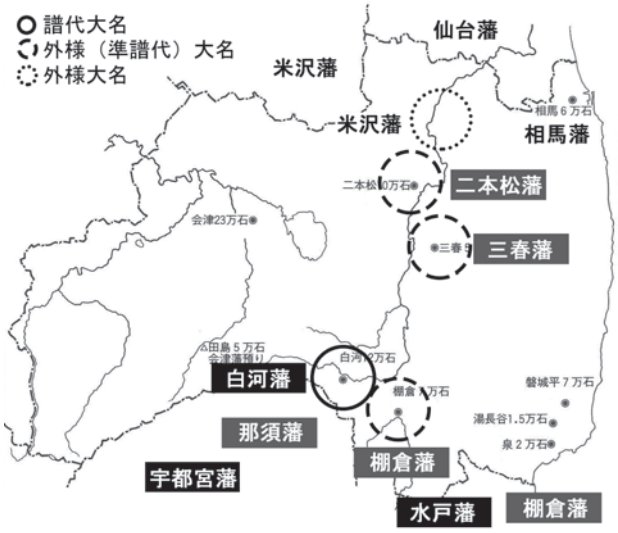

図８　中通り地方の諸藩の配置

図９　奥州道中沿いの大名配置

⑵中通り地方

中通り地方の藩配置を見ると、奥州道中沿いの地域では福島県の南側に位置する那須地方のすぐ東まで水戸藩の領地となっており、奥州道中通過部分は那須藩（準譜代：栃木県那須町）、大田原藩（準譜代：栃木県大田原市）、福島県域に入って白河藩（譜代：白河市・須賀川市）、二本松藩（準譜代：郡山市・二本松市）、米沢藩（外様：福島市以北）が配置され、宮城県域に入ると仙台藩（外様：宮城県白石市）領になる（図８）。

また、水戸街道沿線では水戸藩（親藩：茨城県水戸市）の北に棚倉藩（外様→譜代：棚倉町）が配置され、奥州道中の白河藩領に接続する。さらに、二本松藩と磐城平藩を結ぶ岩城街道沿いに三春藩（準譜代：三春町）が配置され、阿武隈高地中部の支配拠点となっている。

奥州道中沿いでも浜通り地方と同様に南から北に向かって外様大名に変化するようすが見てとれる。奥州道中沿いの福島県域の南側の地域をみると、奥州道中と日光街道の分岐点にあたる宇都宮藩（譜代：栃木県宇都宮市）は北関東地方の抑えとして徳川旗下の有力譜代大名奥平（→本多）氏を配置している。

そこから白河藩までは小規模準譜代大名を配置し、先に見た南奥州の３つの東西南北交通の十字路のうち一番南にあたる白河地方に譜代大名を配置し、中央の十字路にあたる二本松には準譜代大名を配置している。

北の十字路にあたる福島は、この段階では外様大名である米沢藩の領地となっており、同じく外様大名の仙台藩に隣接する形になっている。この外様大名である両藩は関が原合戦の際に敵対した上杉氏

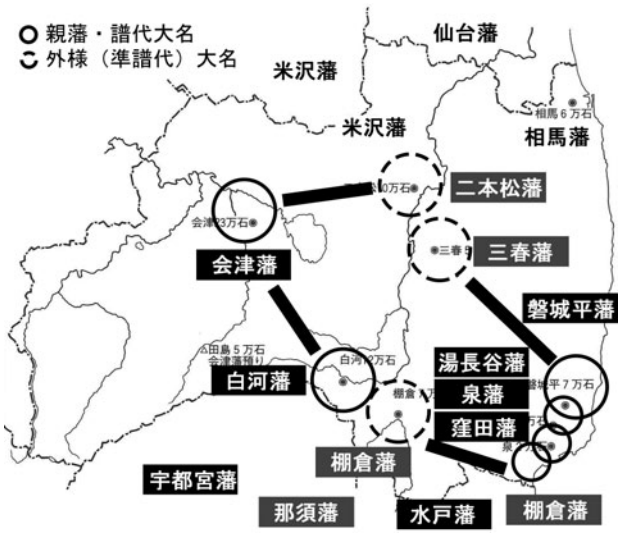

図10　南奥州におけるダイヤ形交通ネットワーク

（米沢藩）と伊達氏（仙台藩）であり、この両者をあえて隣接させている。

この大名配置は浜通り地方と同様、敵対する外様大名を接する形で配置することによって、この地域のパワーバランスを保たせようとする意図が読み取れる。

さらに、後に米沢藩の減封により信夫・伊達地方は一旦幕府領になった後、徳川四天王の一人である本多忠勝の子孫である忠国が福島15万石の領主として移封され、譜代大名が支配する福島藩が成立する。二本松藩の北側にさらに譜代大名の領地を配置することにより、譜代大名の重層配置という図式が強化されていく。

奥州道中沿いの大名配置は江戸を中心として将軍家－有力譜代大名連合（宇都宮以南）－準譜代大名連合（宇都宮～那須）－譜代大名（白河）－準譜代大名（二本松）－外様大名１（米沢）＜後に譜代大名（福島）＞－外様大名２（仙台）となっており、有力譜代大名が配置される宇都宮以北を譜代と準譜代が交互に配置されるいわば譜代・準譜代連合の地域として位置付けられる（図９）。

また、脇街道の水戸街道沿いも親藩である水戸藩の北を棚倉・白河の譜代大名連合が抑える形となっており、棚倉藩は奥州道中の拠点である白河藩と陸前浜街道の拠点である水戸藩をつなぐ中継地点を抑える藩としての役割を担っていたと考えられ、いわば白河藩の「後詰の藩」的存在と解釈することもできる。

さらに、白河藩は水戸街道沿いに東に延びる譜代－親藩ラインの核になっているだけでなく、西の会津藩（親藩）との中継地点にもなっていることから、西に延びる譜代－親藩ラインの核でもある。会津－中通り－浜通り地方の交通路による連携を考えると、親藩（会津）－譜代（白河・棚倉）－親藩（水戸）という江戸防衛ラインも見えてくる。

一方、準譜代大名家である二本松藩も会津地方の中核となる会津藩（親藩）と陸前浜街道の拠点である磐城平藩（譜代）をつなぐ街道の中間地点であるだけでなく、奥州道中とそれらの街道の分岐点、さらに阿武隈川舟運の中流域北端の荷揚げ場としても物流の拠点として機能していた重要地域であった。このことから、二本松藩は格付けとしては外様大名であるが、幕府から非常に重視された準譜代大名と呼べるような存在ではあったと推定できる。

三春藩も奥州道中の二本松城下から分岐した岩城街道が阿武隈高地に入る入口部分に位置し、阿武隈高地越えの主要物流ルートを抑える関門の地として認識されていたと考えられる。この場所も幕府がある程度信頼できると判断できた大名を配置しておく必要があった地域と想定できる。秋田氏は藤井松平家と姻戚関係にある家柄で、外様大名ではあるが、準譜代とでも呼べるような藩と考えることができる。このラインも準譜代（二本松）－準譜代（三春）－譜代（磐城平）という関係が構築されており、奥州道中と陸前浜街道も譜代ラインで結ばれていたことがわかる。

二本松（丹羽氏）・三春（秋田氏）の両藩は外様大名ではあるが、上記のように「準譜代」と呼べるような存在として幕府から認識されていたと考えられ、先にみた南奥州のダイヤ形交通網の北ルートを抑える最重要拠点を治めさせたものと考えられる（図10）。

⑶会津地方

本県会津地方は南山御蔵入領も含めて事実上会津藩が全域を支配する地域であり、下野街道をたどっ

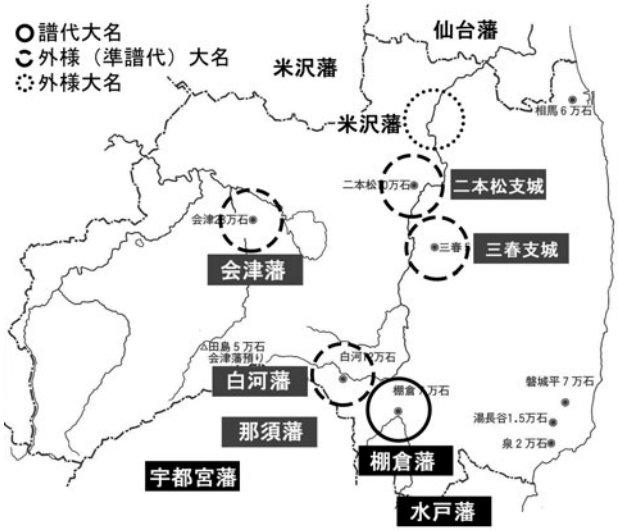

図11　会津の藩配置

図12　会津西街道沿いの大名配置

た南には日光まで治めていた宇都宮藩（譜代：栃木県宇都宮市）、米沢街道をたどった北には米沢藩（外様：山形県米沢市）が配置されている（図11）。

江戸から会津地方に延びる日光街道・下野街道（会津西街道）・米沢街道沿いの大名配置を見ると、江戸を中心として将軍家－有力譜代大名（宇都宮以南）－幕府領（会津藩預かり）－親藩（会津）－外様大名（米沢）となっており、有力譜代大名が配置される宇都宮の北を親藩である会津藩が抑え、北の上杉氏に対峙する構図が想定できる（図12）。

南奥州の外様大名に対抗する大名配置の図式の中で親藩が直接外様大名領地に接するのは特異な状況と考えられる。浜通り・中通り地方の大名配置のように親藩と外様の間に譜代大名を挟むのが通例であると考えられるので、この会津地方の状況は、まさに地政学上重要な地域である会津地方を安定的に掌握することを期待されたことの表れであろう。後々

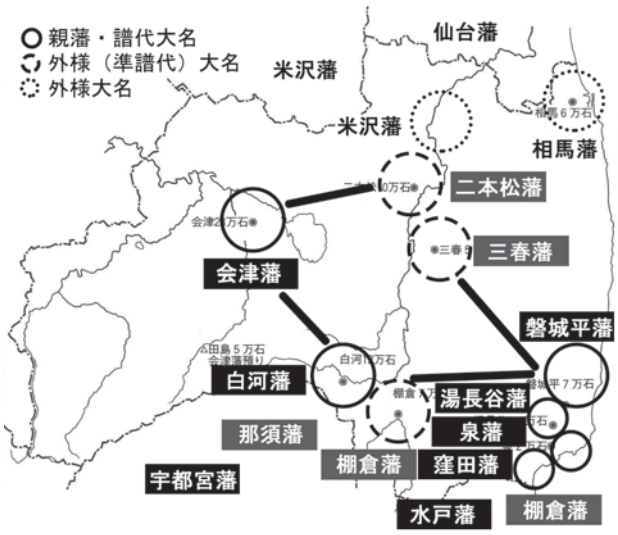

図13　南奥州全体の諸藩配置

まで江戸幕府を支えた保科正之への信頼があればこその配置であったと考えられる。

また、会津藩を含めて二本松街道を東に行った中通り地方の二本松藩、二本松藩から浜通り地方の磐城平藩に向かう岩城街道の関門である三春藩という会津－磐城ライン上に並ぶ三つの藩は連続した街道沿いに密接に連携した関係であったと想定できる（図13）。

それを物語るように加藤義明が会津領主だった段階には、息子の明成が三春藩、娘婿の松下重綱が二本松藩を治めており、まさに会津－磐城ライン上に並ぶ３つの藩を親子が治めていた状況である。

この３地域が密接に関係した地域であったが故に連携が必要だったことをこの大名配置が物語っている。親藩（会津）－準譜代（二本松・三春）－譜代（磐城）と、ここにも親藩・譜代連携ラインをみることができる。

⑷交通路と城郭配置との関係

南奥州では、南北に延びる主要街道とそれを連結する東西の脇街道により各藩が結ばれ、各城下はその交通路の物流拠点として機能していたことがわかる。交通路は各藩の経済を繋ぐだけでなく、必然的に藩の中心部にある城郭を繋いでいる。

いわばこの交通ネットワークは軍事的に各地域を結ぶ機能も兼ね備えている。軍事的緊張関係の有無により城郭配置、城郭間のネットワークは変化することから、江戸初期の城郭配置からこの地域の軍事的状況と幕府の統治方針が見えてくると考えられる。

南奥州においても戦国時代に群雄割拠した各大名が本拠地に築いた城郭が各地に存在していたが、豊臣秀吉による奥羽仕置により県内の大名に対する再配置が行われ、蒲生氏郷による広域支配を支える支城群として県内各地の城郭が整理される（図14）。

県内に広く設定された蒲生・上杉領の支城をみると、後の奥州道中沿いに梁川－福島－大森－二本松－須賀川－白河が並んでいる。これらの城郭は、いずれも交通・物流経路の結節点を抑える位置に築城されている。

梁川城は米沢に延びる羽州街道の分岐点と阿武隈川舟運の中流域北端の荷揚げ場を抑える場所に位置する。

福島城は、庭坂を経由して米沢に至る米沢街道、相馬中村へ延びる中村街道への分岐点、さらに福島盆地内を東西に走る荒川と南北に走る阿武隈川の舟運の合流地点を押さえる場所に位置する。

大森城は、阿武隈川舟運の中流域北部の南端の荷揚げ場、奥州道中の福島盆地への出入口を抑える場

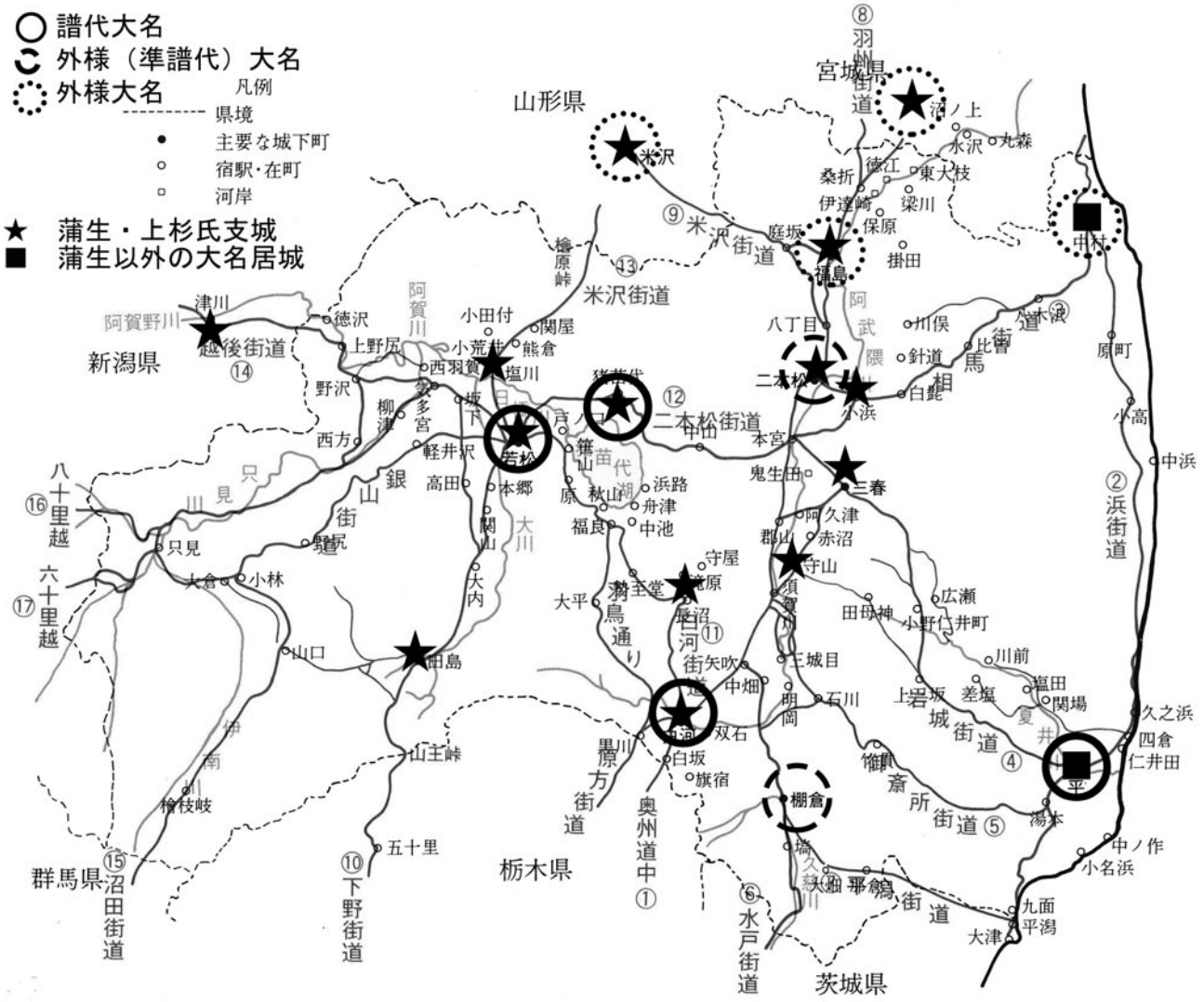

図14　南奥州における蒲生氏支城と城郭ネットワーク

所に位置する。

二本松城は、原町方面に延びる相馬街道、会津若松に延びる会津街道の分岐点、阿武隈川舟運の中流域南部北端の荷揚げ場を抑える場所に位置する。

須賀川城は岩瀬地域を東西に流れる釈迦堂川と阿武隈川の舟運の合流地点、東に進んで石川から磐城湯本まで延びる御斎所街道への接続路の分岐点、西に進んで猪苗代湖南岸を経由して会津に入る白河街道への接続路の分岐点を抑える場所に位置している。

白河城は、西の会津へ向かう白河街道、東の石川を経由して磐城湯本に向かう御斎所街道、棚倉を経由して水戸へ向かう水戸街道、さらに阿武隈川上流部の舟運の荷揚げ場を抑える位置に築かれている。

また、それ以外の支城も、同じように交通・物流の結節点を抑える地点に築城されている。奥州道中から東へ延びる脇街道との接続に関係する城が３つある。

小浜城は二本松城から東に延びる相馬街道の山間部の入り口を抑える位置にある。

三春城は、先にも検討したとおり二本松から磐城平へ向かう岩城街道の山間部の入り口を抑える位置にある。

守山城も三春城に向かう岩城街道から途中で分岐して郡山宿に向かう分岐点に位置しており、それぞれが奥州道中への出入口を固める役割を持っていたと考えることができる。

西側へ延びる脇街道のうち二本松城から蒲生氏の本城に向かう二本松街道沿いには安子ヶ島城、猪苗代城が配置され、奥州道中の南部の十字路である白河城下から白河街道が奥羽山脈に入る入口には長沼城が配置されていた。

会津地域では、先に見た二本松街道沿いの支城の他に、北の米沢街道沿いに塩川城、西へ向かう越後街道沿いに神指城、南の下野街道沿いには南山城（鴫山城）、只見川流域から上野に向かう沼田街道沿いに伊南城（久川城）を配置している。

以上のように、蒲生・上杉氏支配の段階で支城として残された城郭は、いずれも各交通路を掌握するための重要拠点と考えられる地域のものであった。つまり、この段階には江戸時代の藩配置の基礎となっている南奥州を繋ぐ交通網が確立しており、それぞれの優先度も既に明確になっていたと考えられる。

蒲生支城段階で認識された各地域の重要拠点を効率よく支配することを目的として幕府は各大名の配置方針を検討し、最終的な藩配置案を決定したことであろう。そのため、各藩の配置状況から幕府の南奥州経営政策を導き出すことができると考えられる。

江戸初期には各藩の中心にのみ城郭を残す元和一国一城令を出すなど、幕府は各藩の軍事力を抑制することを意図して諸政策を行ってきたことがわかる。南奥州、その中でも特に福島県域は外様大名配置圏と譜代大名配置圏の境目にあたり、大名配置に工夫が必要な地域であったと考えられる。軍事的には伊達氏・上杉氏などの有力外様大名にどのように備えるのかが政策課題として挙げられる地域である。

このような政策意図が、先に検討したように藩配置に反映されていたと考えられ、城郭配置及び城主の選定理由から南奥州の支配政策を読みとることができる。

4　丹羽家移封の意味

江戸前期の南奥州の大名配置を見た場合、丹羽長重・光重親子の動きは特に目立った存在として映る。元和８年（1622）常陸江戸崎から棚倉藩、寛永４年（1627）棚倉藩から白河藩、寛永20年（1643）白河藩から二本松藩へ移封というように県南を皮切りに二本松へ向けて次々と領地を北上させている（図15）。

この丹羽氏の移封には当然のことながら、江戸幕府の意図が反映されている。丹羽氏の果せられた役割を考えた場合、その活動拠点であった南奥州に対する幕府の統治政策が反映されていたと考えられる。

今回は、先に交通路・城郭配置からみた各藩の地政学上の役割を踏まえ、丹羽氏の各領地における事績をどのように評価できるのか、また全体として丹羽氏が南奥州で果たした役割について検討していく。

⑴棚倉藩以前の丹羽氏

丹羽長重は織田家の宿老であり安土城の普請奉行を務めた丹羽長秀の子である。豊臣秀吉に重用され、小田原攻め・朝鮮出兵の功により加賀小松12万石を与えられている。

秀吉没後は徳川家康から加賀金沢の前田利長の監視役の役割を期待され、関が原合戦の際には、北陸における関が原の戦いとも呼ばれる「小松城浅井畷の戦い」において長重の居城小松城を攻撃した東軍の前田利長と戦った。この戦いにより長重が西軍に与したことになったため一旦は改易されたが、江戸に幕府が開かれた慶長８年（1603）に常陸古渡藩（１万石）の初代藩主として大名に復帰した。

大阪の陣での活躍により元和３年（1617）には２代将軍徳川秀忠の御伽衆として棚倉藩初代藩主になる立花宗茂らとともに秀忠に仕え、元和５年（1619）に常陸国江戸崎藩（２万石）、さらに元和８年（1622）には棚倉藩（５万石）に加増移封される。

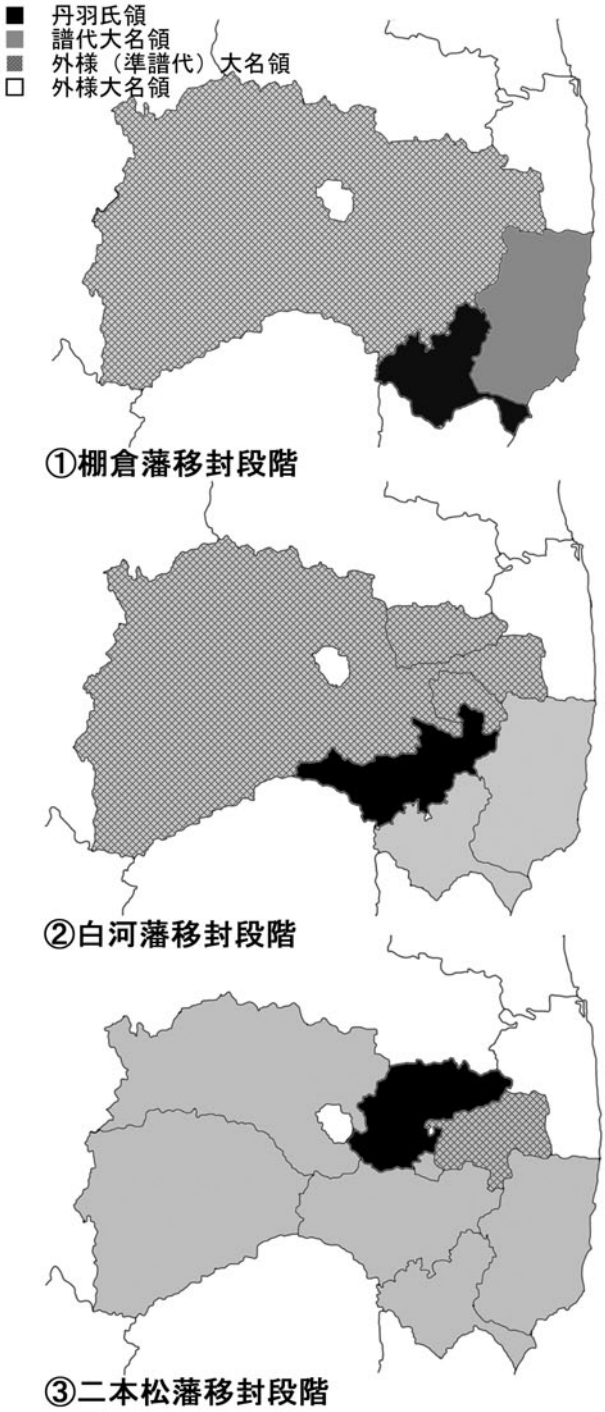

図15　丹羽家移封に伴う領地の変遷

丹羽長重の棚倉藩移封までの事跡を見ると、外様大名でありながら徳川家康・秀忠と一定程度信頼関係を築いていた大名であることがわかる。丹羽氏は幕藩体制確立期において幕府の施策実現のために幕府の尖兵としての働きを期待された存在、幕府の南奥州統治における要石としての役割を担わされた存在の一人であったと考えられる。

⑵棚倉藩への移封

①立花宗茂の棚倉藩立藩

丹羽長重の入府する棚倉藩は、初代藩主が長重とともに２代将軍秀忠の御伽衆を勤めた立花宗茂である。

宗茂は豊後大友氏の重臣の家柄で、豊臣秀吉の九州平定で活躍し、秀吉から忠義も武勇も九州随一であると評された人物である。その功により筑後柳川13万２千石を与えられ、大友氏から独立した大名として取り立てられた。関が原合戦の際にも徳川家康からの寝返りの誘いを断り、西軍として戦った武将である。

大津城攻略戦で本戦に間に合わず、大阪城での籠城戦を進言するが、聞き入れられなかったため、自領の柳川に引き揚げる。自領では黒田・加藤・鍋島連合軍が柳川めざして進軍する中、宗茂は家康への恭順を示すため、自らの城に残り籠城する形となったが、最終的には降伏開城した。

そのため、関が原合戦後は改易となり、浪人となるが、家康の重臣である本多忠勝の推挙により将軍・徳川家康から幕府の御書院番頭として５千石を給されることになる。さらに嫡男・秀忠の御伽衆に列せられて慶長８年（1603）陸奥棚倉藩１万石を与えられて大名として復帰した。

慶長15年（1610）には３万５千石に加増され、大

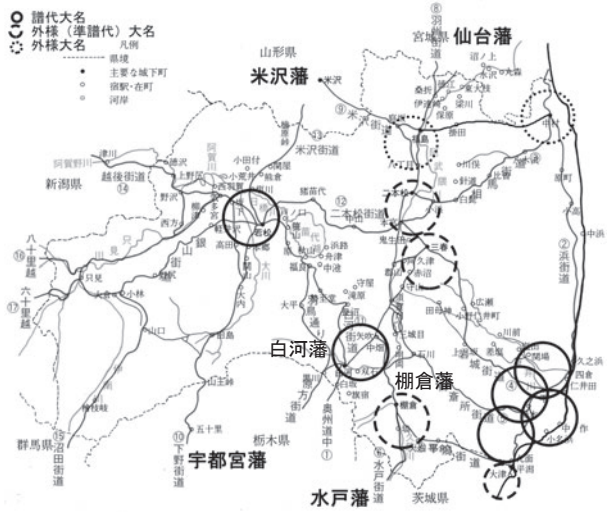

図16　棚倉藩と周辺の藩の関係

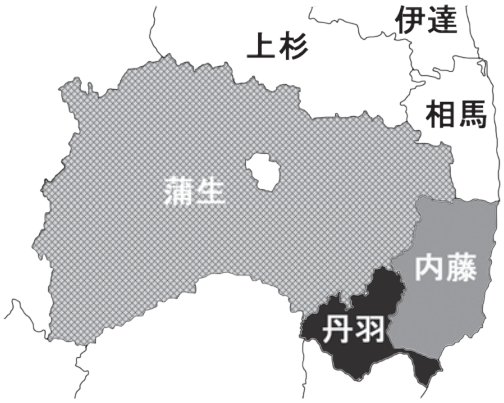

図17　丹羽氏移封段階に拡大した棚倉藩の領地

阪の陣では２代将軍秀忠の軍師参謀として活躍したことにより、元和８年（1622）に旧領の筑前柳川藩10万9200石に加増移封される。

立花宗茂は徳川秀忠の御伽衆を勤めるなど幕府から信頼される存在であり、この宗茂が大名に復帰する際に立藩された棚倉藩は、重要な意味を持った地域であったことは、先の交通路及び城郭配置の検討からわかる。

このような重要拠点を任せられた宗茂が幕府から信頼された存在であったことは容易に想像がつく。南奥州の拠点の一つである棚倉藩は、南奥州の要である中通り地方南部の拠点となる白河、さらに南に位置する親藩の水戸の両方に駆けつけられる位置にあり、この二つの藩をいざというときには支える役割が期待された地域である（図16）。

さらに、対伊達氏政策の観点で見ると、伊達氏が奥州道中を江戸に向かって進攻した際には、まず敵対する米沢藩の上杉氏領を通過しなければならない。さらにその次には先に見た南奥州のダイヤ形城郭防御システムの北の拠点である二本松城、さらに南の拠点である白河（小峰）城を通過して、下野方面に南下しなければならず、白河のすぐ隣に位置する棚倉はまさに南の拠点である白河の支援を行うとともに、この防衛ラインが突破された場合の水戸方面に対する防御の盾となる役割も期待された地域であると考えられる。

立花宗茂は、まさにこのように南奥州の軍事を含めた統治システムを南から支える新しい要の地を治める拠点整備を行うために派遣された大名であると考えられ、中枢の若松・二本松・白河・磐城平をバックアップする体制強固のために新たな布陣、南奥州統治政策の第二段階へ向けての布石と考えられる。

棚倉藩は左右に翼を広げて浜通り・中通り地方南部の両地方の譜代大名を支援する役割を期待された存在であったと考えられる。

②丹羽長重の棚倉藩入府

そのような役割を担わされた棚倉藩に入府するのが丹羽長重である。長重は、立花宗茂の後を継いで棚倉藩主となるが、その段階でも棚倉藩に新たな役割が付与されたと考えられる。立花宗茂の段階で３万５千石であった棚倉藩が平潟などを含む地域をさらに拡大し５万石に加増され、長重が藩主となることになる（図17）。

新たに領地になった平潟（茨城県北茨木市）周辺は戦国期には岩城氏領であったが、関が原合戦により慶長７年（1602）岩城貞隆が改易になり、秋田角館から戸沢政盛が初代藩主として入府し、常陸松岡藩が立藩される。平潟港は東廻り航路の寄港地として栄えた港であり、太平洋海上交通の重要拠点として注目されていた地域であるだけでなく、陸前浜街道と平潟街道の合流点として陸上交通の要の地域でもあった。

このような水陸交通の結節点である平潟は太平洋岸地域の重要拠点であったと考えられる。

元和８年（1622）に戸沢氏が出羽新庄に国替えされるのに伴って領内が二分され、北が棚倉藩、南が水戸藩領となる。この時に棚倉藩に移封されたのが丹羽長重である。

③平潟を加えた棚倉藩の役割拡大

平潟を含めた陸前浜街道沿いの大名配置を見た場合、平潟の北には譜代大名磐城平・湯長谷・泉藩の内藤親子連合、そのすぐ南には磐城平藩主内藤政長の娘婿である土方雄重の治める窪田藩が位置し、平潟の北は譜代大名内藤親族連合、平潟の南は親藩の水戸藩が位置する。

平潟を加えた棚倉藩は先の中通りの藩配置と同じように、北の譜代大名連合を支援する立場の棚倉藩、南の水戸藩の盾となる棚倉藩という関係が成立しており、平潟地域の棚倉藩接収は奥州道中における棚倉藩の役割を陸前浜街道沿いでも実現することを意識したものと考えられる。

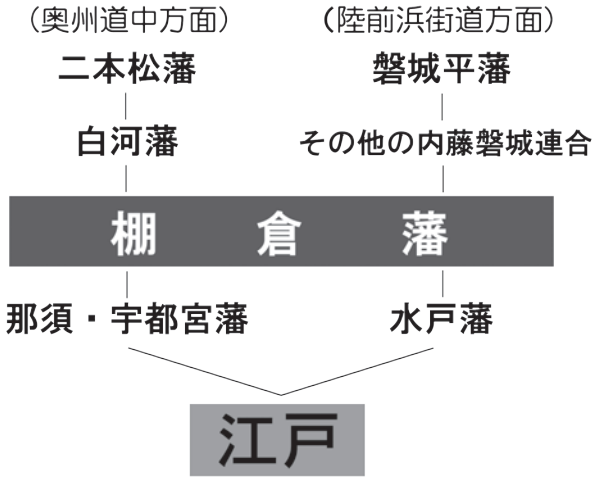

図18　棚倉藩の役割想定図

図19　棚倉城絵図

対伊達氏政策としての軍事的意味を考えると（図18）、伊達氏の治める仙台藩から江戸を目指す場合、使えるルートは先の奥州道中の他にもう一つ陸前浜街道という選択肢もある。伊達氏が陸前浜街道を進攻する場合、敵対する相馬藩領を通過し、内藤親族譜代連合の領地を通過し、棚倉藩領の平潟を通過するようになる。つまり、伊達氏の進攻ルート上には親藩の水戸藩の領地までの間に３重の防御線を想定した大名配置人事が行われたと考えられる。

内陸の棚倉藩は、ちょうど左右に翼を広げるように水戸藩を守っており、奥州道中・陸前浜街道の２大街道のどちらの関門も支える後詰めの藩としても重要な役割を期待された存在となっていたことがわかる。

そのような棚倉藩の重要な役割を完成させる領主として派遣されたのが丹羽長重であり、長重がいかに幕府から信頼・期待された存在であったのかがうかがえる。長重によって棚倉藩の南奥州における存在意義が確立していくともいえる。

④棚倉城築城の意味

長重が入部する前までの東白川地方の中心城郭は、現在の棚倉町北部にある赤館城であった。赤館城は棚倉城から北に約1.5kmの位置にある城郭で、戦国期も白河結城氏と常陸佐竹氏の攻防の城であった。赤館城は東白川地方を支配するうえで、さらには南

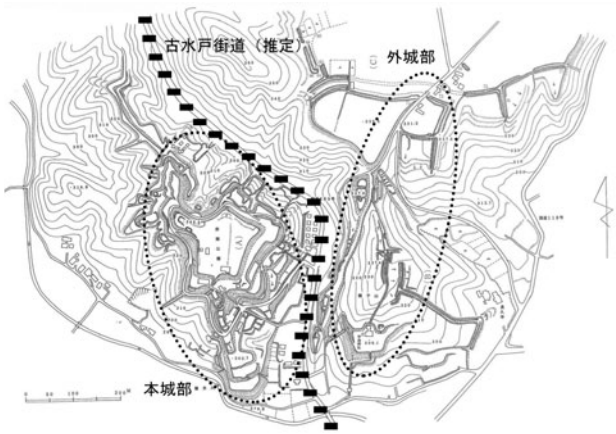

図20　赤館城と周辺の交通路

の佐竹氏に対峙する最前線司令部として重要な城郭であった。

長重は元和８年（1622）正月に棚倉藩主を拝命し、寛永元年（1624）９月12日に幕府より赤館城の普請についての許可を得ている。この段階までは長重は赤館城を拠点に棚倉藩の整備を計画していたことがわかるが、その９日後の９月21日には幕府より赤館城以外の場所に城を建てるように命令変更がなされる。しかも、長重自身で領地内を検分して適地を探し、改めて上申するように幕府から命が下ったのである。

１ヵ月後には近津大明神（馬場都々古別神社）の移転先の検地が行われ、移転先の土地の引き渡しが行われている。この短い期間の中で近津大明神を移転し、新たな棚倉城を現在の場所に築城することが決定されている（図19）。

何らかの緊急の理由により、それまでの拠点城郭を捨て、新たな中心拠点としての城郭を整備する必要があったことがわかる。

近津大明神は、白河結城氏と常陸佐竹氏の和睦会場になるなど、当時の東白川地方においては宗教的・世俗的権威を持った存在であり、地域の中で一定の影響力を持った存在であったことは想像できる。この近津大明神を移転するということは、それまでの中世的権威が絶たれたことを意味し、新たな時代の幕開けを地域の中に示す大きな事件であったと考えられる。各大名による寺社統制は、まさに近世的権威の確立を象徴するものであるといえる。

また、この近津大明神の移転には周辺地形環境・地理的環境から見た別な意味も考えられる。

もとの近津大明神があった場所（現在の棚倉城のある場所）は棚倉地方を流れる久慈川流域の沖積地の中に島状に浮かぶ河岸段丘上に位置しており、久慈川流域全体を掌握する上では絶好の場所である。

中世段階で中心城郭であった赤館城は、その北1.5kmに位置する東西に延びる丘陵上に築城されている。赤館城は、いわば地域の中心に位置する近津大明神とその周辺に展開する集落群を南に見下ろす形で郭が配置されており、南方の常陸佐竹氏の進攻を意識する配置となっている（図20・21）。

しかも、北へ向かう古水戸街道が城のすぐ東側を通過するような配置となっており、道を挟み撃ちできるような形で外城部と考えられる遺構が展開している。南からの敵の侵攻防御と北への交通遮断を想定した構造になっている。

そのため、白河から棚倉に西側から入る脇街道は監視しにくい状況となっている。赤館城は、明らかに南側からの敵の侵入を監視することに特化した配置の城であるといえる。

当時の古水戸街道は、古代の東海道白河延長路を踏襲していたと考えられ、白河方面から建鉾山周辺の丘陵鞍部を越え、町の西側から久慈川沿いに南下するルートが当初のものと考えられる。中世のどこかの段階で、赤館城の通行遮断機能を高めるために、古水戸街道の本線部分を北に延ばし、当初の西側ルートは脇街道的な存在になったと考えている。このように西側からの人の移動は赤館城では監視しにくく、白河方面から南下する二つのルートと常陸方面から北上するルートの両方に見通しがきくのが、もともと近津大明神があった河岸段丘上となる。

この段丘は周辺の沖積地から比高差約10mの小高い場所であり、城郭を築き、白河・水戸両方面ににらみを利かせるには絶好の場所である（図21）。

既に慶長７年（1602）段階で佐竹氏は秋田に移封され、南には御三家の水戸藩が成立しているため、南に対する監視を重視する必要がなく、逆に外様大

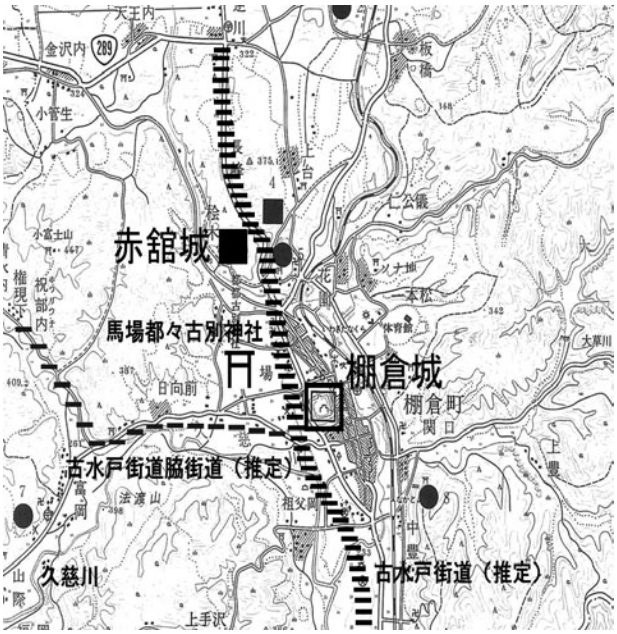

図21　赤館城・棚倉城と交通路

名が北方にひしめく白河方面からの軍の移動を監視しにくい赤館城は寛永段階では棚倉地方を治める城郭としてはふさわしくないと判断されたのであろう。

北と南の両方からの交通を監視できる近津明神のあった丘陵は寛永段階の新たな情勢に対応する城郭を築くのには適切な場所であった。

⑤棚倉城石垣と交通路

また、中世的権威の象徴である近津大明神を移転させるということは、中世的権威の終末、新たな近世的権威である幕府・棚倉藩の威光を領民に示すことも意味し、地域支配の拠点である棚倉城をこの場所に築城するのは、二重の意味で地域支配を強固なものにすると判断されたのであろう。

新たに築かれた棚倉城は、二の丸の西側部分にのみ石垣が積まれており、本丸以下、その他の部分にも石垣は見られない。石垣を多用せず、堀と土塁で構築されるのが棚倉城の特徴でもある。

棚倉城の築城は寛永２年（1625）正月から開始され、築城途中の寛永４年（1627）に長重は白河藩に移封される。築城工事は後任の内藤信照に引き継がれ、同年中に完成している。日程から見れば、おそらく内藤氏に引き継がれた段階には、棚倉城はほぼ完成に近い状態であったと考えられる。

正保年間（1645～48）に作られたと考えられている「奥州棚倉城之図」を見ると（図22）、この段階で奥州道中が城内に隣接する形で丘陵上に引き込まれており、城郭整備に伴い、街道の付け替えが行われていることもわかる。城郭の整備は、それ単体だけでなく、周辺の街道も含めた城下町、さらに領内の各種施設等に大きな変更が加えられたと考えられる。

この街道の付け替えと関連して二の丸石垣の設置理由も解釈することができる。鈴木啓氏は二の丸石垣は「見せる」効果を意識した石垣として街道等からの遠望を意識したものであると解釈されているが、筆者も同様の考えである。

筆者は棚倉城築城前の段階の古水戸街道は、古代の東海道白河延長路を基本的に踏襲する形でルートが設定されていると考えており、中世段階では現在の久慈川東岸沿いに延びていたと考えている。絵図によれば、棚倉城築城時に水戸街道は河岸段丘上の城に近接した位置に付け替えられており、いわばバイパス新道として直線的に北上するルートが設定されたと解釈できる。

この段階で旧道となった築城前の水戸街道ルート（段丘崖西下を通ると考えられる）が廃道になっているわけではなく、旧来の道も使われていたとすれば、まさに久慈川の舟運、旧来の水戸街道ルートから見える部分に石垣が積まれている形となる。

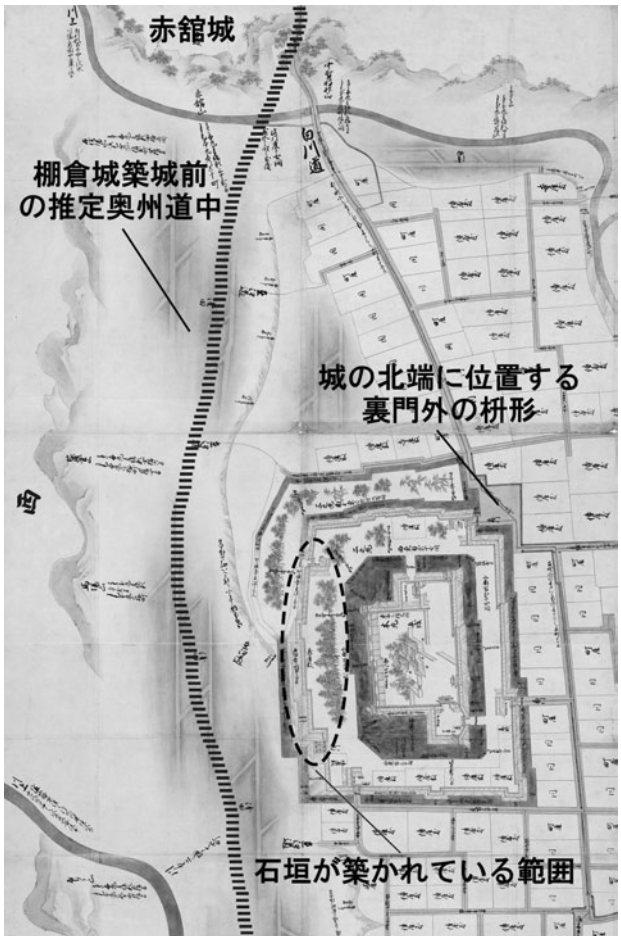

図22　赤館城・棚倉城と交通路

さらに、絵図中には城の南に展開する武家屋敷のさらに南を奥州道中から分岐して丘陵下に移築された近津大明神（馬場都々古別神社）に至る道も描かれている。この道は近津大明神（馬場都々古別神社）の先、久慈川上流部にも延びていることから、近津大明神移転先周辺の道路が旧道を改変したものと考えられ、近津大明神は旧道側に移転されたと解釈できる。

さらに、この道路から見上げる部分に石垣が築かれており、おそらく近津大明神（馬場都々古別神社）や旧道から見えることを意識して造られた石垣といえる。城の権威付けとして交通路や宗教施設からよく見える二の丸西側部分の段丘崖に石垣を積んだ可能性が考えられる。

織豊系城郭の大きな要素であり、城の権威付けとして大きな役割を果たす石垣を棚倉城では部分的にしか取り入れられていない理由の一つとして築城期間の短縮化が考えられる。

新たに棚倉藩主となった丹羽長重に対して本城として赤館城の改修を一度許可しながら、すぐに別な場所での築城を検討するように指示を出しているということは、先にも見たように城の戦略的位置の変

更だけでなく、築城に急を要する事情があったのではないかと考えられる。緊急に築城する必要があるゆえに、時間のかかる石垣を必要最小限にし、堀と土塁を基本にした方形居館をベースにした城にしていると考えられる。

また、先に検討した棚倉藩の役割を考えた場合、浜通り地方の磐城平城連合と中通り地方の白河（小峰）城の支援が主な任務であることから、この城から両城に兵を進めることはあっても、この城を主戦場に籠城戦を行うことは想定されていないと考えられる。棚倉城の規模・構造は籠城戦を想定した城の縄張りとしては簡略化されており、積極的に外に兵力を展開する役割の城であるとみることができる。後詰めの城として最小限の防御性を持った城として意識されていたのであろう。

さらに、この城の必要以上の城塞化は、敵に奪取された場合に、親藩水戸藩の喉元に刃を突き付ける大きな足掛かりとなる危険性があり、白河・磐城の両拠点の支援体制を賄える必要最小限の防備を備えた城として短期間で完成させたかったのではないかと考えられる。

さらに、棚倉城周辺で北上するルートを１本に集約させた水戸街道も、北に赤館城、南に棚倉城というように街道の南北に城郭を配置する形に変更されており、白河方面、さらに北からの外様大名の進攻を考えた場合に防御性を高める配置となっている。

棚倉城においても、城郭・城下整備に伴って街道整備を含めた全体の防御性の向上が意図されていたと考えることができる。

⑶白河藩への入府

南奥州の城郭整備を行う場合、江戸に近い白河・磐城方面へ睨みをきかせる棚倉城をまず整備し、その後、外様大名と対峙する可能性が高くなる北に位置する城郭の整備に順次取り掛かるのが常道であろう。その考えに立てば、次の整備対象は、ひとつ北にある白河（小峰）城である。

丹羽長重は棚倉城の整備がほぼ完了に近づいた寛永４年（1627）に白河藩に移封される（図23）。まさに、先に見た外様大名対抗シフトの中の白河城の整備に取り掛かるためと考えられる。

白河（小峰）城は東日本大震災により石垣を中心に大きな被害を受け、その復旧工事の中からさまざまな新しい知見が得られている。

最近の発掘調査の結果、白河（小峰）城は会津支城段階で本丸北面や竹之丸などに石垣が積まれ、一部近世城郭化されていたことが分かってきている。

県内の他の会津支城段階の城郭でも石垣が作られ

図23　白河藩移封段階の丹羽氏の領地

始め、近世城郭としての整備が始まっているが、白河（小峰）城も同様な傾向が見られる。

部分的に整備されてきた白河（小峰）城が本格的に総石垣の城郭として整備されるのが、長重が白河藩に移封した後の寛永６年（1629）～９年（1932）といわれている。

白河（小峰）城は、先に見た中通り防衛ラインの南の中核城郭として重要拠点であるため、棚倉城とは違った総石垣の城郭として整備されたと考えられる。南奥州北部の有力外様大名が中通り地方を南に進軍した場合には、南の江戸・水戸を防衛するための核になるのが白河（小峰）城であり、総石垣は防御性に富んだ中核城郭にふさわしい城の構造である（図25）。

また、阿武隈川の流路変更に伴う武家屋敷町の新設、城郭縄張りの変更に伴う街道と城域の密接化、城下に入る街道入口部分の防御性の向上、集落の移動も含めた街道ルートの変更など、城の防御性を高めるだけでなく、城下町、城下を通過する街道の取り込みなど、城下全体の防御性を高める方向で全体整備が進められている（図26）。

まさに、防御拠点としての城郭と、それを結びつ

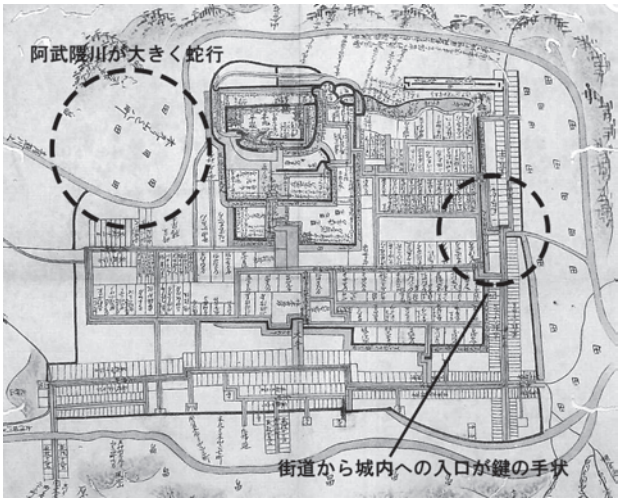

図24　丹羽氏移封前の会津支城段階の白河城

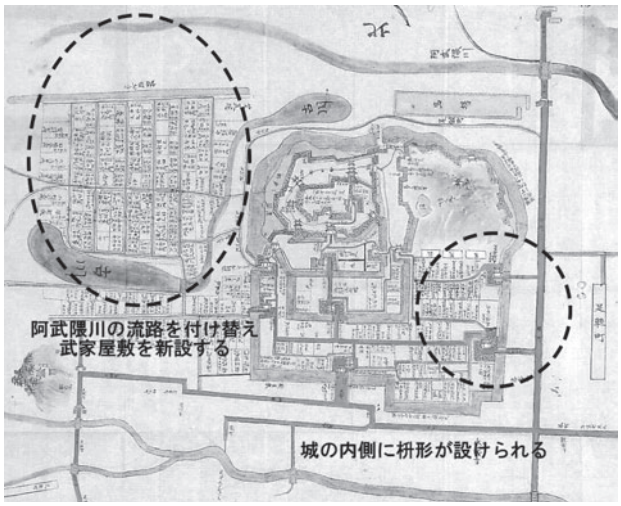

図25　丹羽氏移封後の白河城

ける街道の軍事的整備が行われており、棚倉城を後詰めの城として防御ラインを北に確実に延ばす形の幕府政策が丹羽長重によって確実に実施されていることが確認できる。

⑷二本松藩への移封

丹羽長重が白河藩に移封になる寛永４年（1627）には、伊予松山藩から加藤嘉明も会津へ移封になる。

この段階で白河藩が会津藩から独立するが、他にも嘉明の子の明利が三春藩、嘉明の娘婿松下重綱が二本松藩を拝領するなど、中通り南半部の藩体制が固まってくる。この体制はまさに北部の伊達・上杉などの外様大名に対する防衛ラインを強化するための藩配置と考えられ、二本松城に対する軍事的役割の期待はさらに高まったことが予想される（図27）。

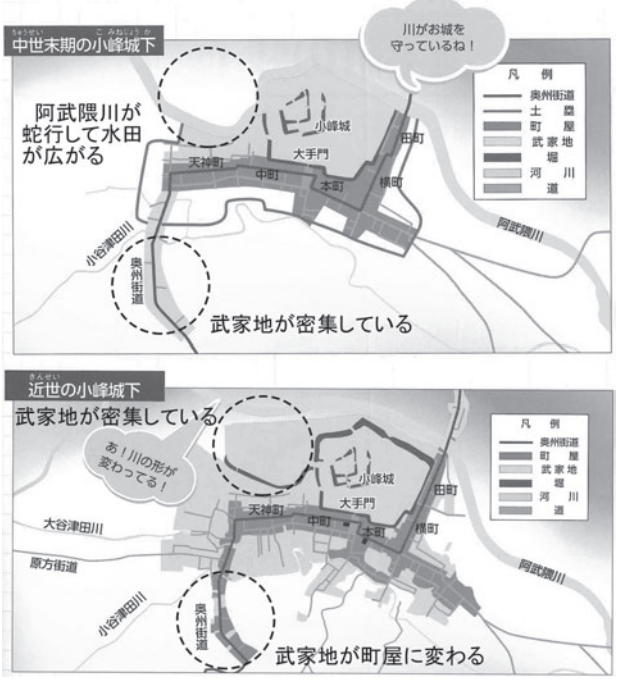

図26　丹羽氏による白河城域全体の改変状況

図27　二本松藩移封段階の丹羽氏の領地

二本松城の発掘調査および城下絵図の研究から、二本松城が中世城館から近世城郭に大規模に改修されるのは寛永４～20年（1627～1643）の加藤・松下氏時代であることがわかってきている（図28）。白河（小峰）城を総石垣の近世城郭に大改修する時期に、二本松城も加藤氏一族により三の丸を中心とした平場の確保と高石垣の整備が進められた。

慶長期の姿を描いていると考えられている「会津郡二本松城之図」（図29上）と丹羽氏入府直後の寛文期の姿を描いたと考えられている「奥州二本松城図」（図29下）の比較により本丸や三の丸が加藤氏段階で大規模に改変されていることが分かっている。

寛永初期の二本松城は、慶長期に進められていた近世城郭化をさらに進め、中腹以下を大規模な土木工事により石垣が強調された城郭へより進化させたと考えられる（図29）。

このように寛永初期の段階で、中通り防衛ラインの北と南の拠点である二本松城と白河城がほぼ同時に近世城郭化を加速させ、強固な守りと幕府・藩の威厳を可視的に示す石垣の整備が進められたことは、

図28　会津支城（加藤氏）段階で整備された三の丸

図29　二本松城三の丸の改修状況模式図

北にひしめく外様大名に対する対応施策が着実に実行されていることを示している。

白河（小峰）城では城郭整備に並行して城下・街道の整備も行われていたが、二本松城についても加藤氏支配の段階で、それまで城に隣接していた奥州道中を南に移動し、その間に武家屋敷を配置して城の防御性を高めている。

中通りの二つの城は城郭整備と城下整備が同時に行われ、城下の軍事性も高められていたわけであるが、外様大名の領地に接する二本松藩は白河（小峰）城よりもさらに防御性を高める最終仕上げの整備が意図されていたことが、その後の周辺整備から見えてくる。

寛永20年（1643）になると、白河（小峰）城の近世城郭化を進めた丹羽長重の子である丹羽光重が二本松藩主として入府してくる。

加藤氏支配の段階で近世城郭化と街道移転による城下の防御性向上を果たした二本松城であったが、光重はさらに奥州道中に沿って東西に延びる観音丘陵のさらに南に奥州道中を移転させている。旧奥州道中沿いの町屋はすべて観音丘陵の南に移転した奥州道中沿いに再配置され、観音丘陵より北部地域を武家屋敷として城郭の構造強化を図っている（図30）。

さらに、旧奥州道中沿いに配置されていた寺社を観音丘陵上に再配置し、観音丘陵上が緊急時には出丸として使用できるような構造に変更している。

二本松城とその城下に広がる武家屋敷群は、北・

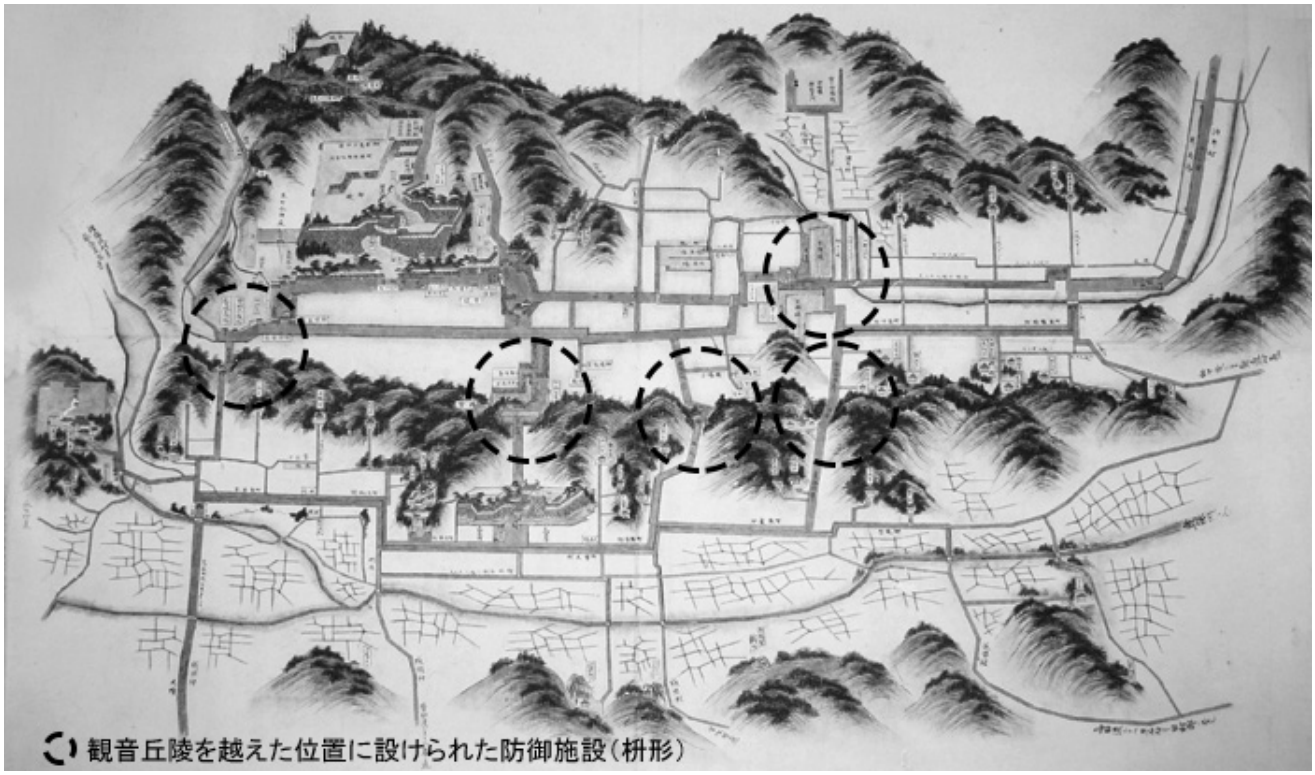

図30　丹羽氏による二本松城外郭整備のようす

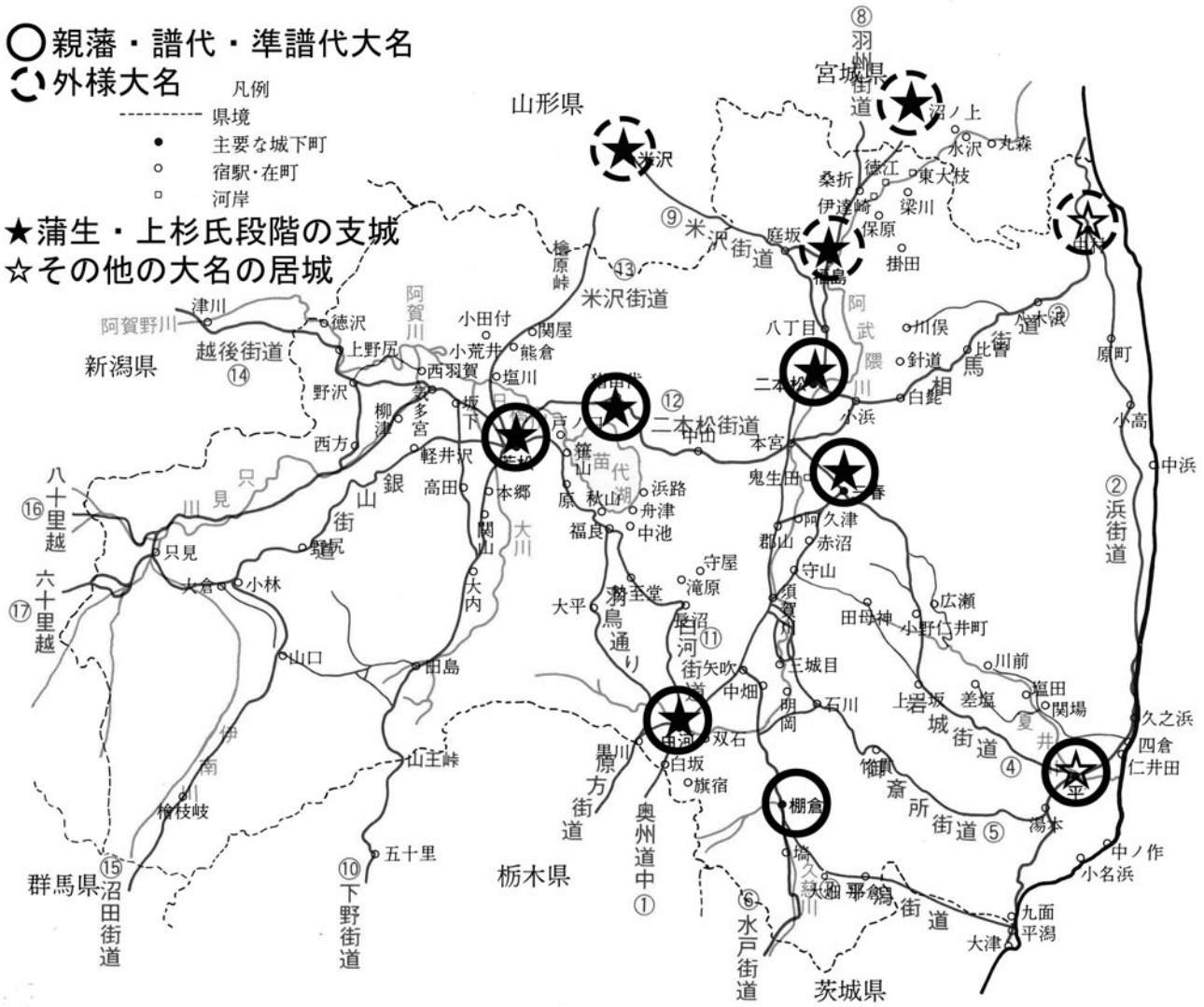

図31　南奥州における城郭配置図

東・西を安達太良山系から張り出してくる丘陵地に囲まれ、南もそれに蓋をするように観音丘陵が東西に延びている。まさに周囲を丘陵で囲まれた盆地状の地形となっていることから、天然の巨大な土塁で周囲を防御された構造となっている。

丹羽氏段階の城下町整備は、城郭と武家屋敷地を結合させることにより、城郭の軍事性を向上させており、二本松城の強固な守りを最大限まで高める工夫であるとも言える。

このように丹羽光重により最終仕上げが行われた二本松城下は、幕府の思惑通り、南奥州支配の北の拠点としての役割を果たすことになる。

まさに中通りの対伊達・上杉シフト最前線となる二本松城及び城下の防御性の向上が図られるのと時を同じくして、会津藩に３代将軍家光の異母弟である保科正之が入府する。奥州道中から会津方面への入口にあたる二本松城下の要塞化は会津藩の防御の役割を果たすことにもなり、二本松城が何度も奥州道中を移動させながら実質的に城域を拡大させ、防御性を高めていく背景には会津・江戸の２方面の防御の最前線の整備という意味合いがあったと考えられる。

江戸幕府にとって北の脅威であった伊達政宗は、寛永四年（1627）伊予松山藩主加藤嘉明の会津移封に伴う南奥州拠点城郭整備の進展の中、寛永十三年（1636）に死去する。政宗の死は、江戸幕府から見れば奥州の安定化へ向けたある意味望むべき要因であったと考えられ、これにより奥州安定化政策は一旦沈静化を迎えたことと思われるが、翌年に起こった島原・天草一揆により、再度、周辺地域における警戒と安定化に向けた政策が検討され、寛永二十年（1643）には保科正之の会津移封と丹羽光重の二本松移封が実施されたものと考えられる。

⑸江戸・水戸防衛ラインの形成との関連

これまで見てきた本県中通り地方の棚倉・白河

（小峰）・二本松城は、いずれも東北北部に配置された外様大名から江戸・水戸を防御するための重要拠点であり、それらの城郭の近世城郭化、城下町の整備、城下全体の防御性向上が求められていたが、それを順次実行に移していたのが丹羽長重・光重親子と立花宗茂である。

棚倉藩の中通り地方南半支配の拠点として白河（小峰）城の後詰めの城としての役割強化の基礎を築いた立花宗茂、平潟港の領有化により棚倉藩を陸前浜街道方面の磐城平城の後詰めの城として機能を追加し、奥州道中・陸前浜街道の両街道の抑えとしての城郭整備を行った丹羽長重、さらに白河（小峰）城の近世城郭化と城下町の整備を含めた城下全体の防御性を高める基礎を築いた丹羽長重、さらに近世城郭化と城下町整備が進められていた二本松城の防御性の更なる強化を図った丹羽光重と、まさに外様大名でありながら、幕府の信頼を得た準譜代大名とでも位置付けられる大名たちによって、まさに対伊達氏シフトの江戸防御線の強化が図られた。

これらの防御線の形成のために中通りの諸藩の配置、城郭の整備などが進められたわけであるが、二本松藩の成立でほぼ完成の域に達した状態であった。

しかし、寛文４年（1664）の上杉綱勝の死去に伴う嗣子問題により米沢藩は減封となり、奥州道中の要衝の地である福島・伊達地方は幕府領となり、さらに延宝７年（1679）に徳川四天王の一人、本多忠勝の末裔である本多忠国が福島15万石の領主として移封されることによって福島藩が成立する。

このことにより、対伊達の最前線の役割を果たした二本松藩のさらに北に譜代大名を配置することとなり、この段階まで確実にこの防衛ラインの重層化が幕府によって意識されていたことがわかる。いわば福島藩の成立により奥州道中沿いの江戸防衛ラインが完成したと言える。

このような観点で中通り地方の諸藩を見てきた場合、小藩ではあるが棚倉藩に期待されていた役割は非常に大きいことがわかる。その棚倉藩主を皮切りに、中通り地方における江戸防衛ラインの形成を先頭になって担ってきた丹羽氏の果たした役割は大きなものであると評価できる。

5　おわりに

今回は棚倉藩と丹羽長重・光重親子が南奥州において果たした役割について検討してきたが、棚倉藩の持つ地域的重要性、丹羽親子が幕府から託された役割などを通して、南奥州、特に福島県域が江戸幕府の首都防衛ラインを重層的に形成していた重要な地域であったことを明らかにすることができたと考えている。

関が原の戦いで改易され、復帰した大名の中で最終的に10万石以上の領地を手にしたのは丹羽長重と立花茂重の両名だけである。この両名は、本文中でも述べたように、いずれも棚倉藩の領主であり、しかも藩成立期に重要な役割を果たした存在であったことは福島県民としても誇りに思い、さらに積極的に評価していきたい歴史事象であると感じている。

棚倉城・白河（小峰）城・二本松城は幕藩体制確立期における南奥州の重要拠点であり、いずれも当時の南奥州の状況を理解する上で欠くことができない文化財であると言える。

白河藩主であった丹羽長重は、臨終に際して子息や家臣に対して、徳川将軍家からの恩を第一とすること、幕僚と円滑に付き合い、幕府に対して忠勤に励むことを遺言に残していると伝えられている。まさに保科正之の家訓に通じる心情である。

このような長重の思いが二本松藩に脈々と受け継がれ、幕末の戊辰戦争の際には会津藩同様に二本松藩も激戦地として激しい戦闘が繰り広げられ、会津藩の白虎隊と同様に二本松少年隊も活躍する風土が築かれていたことを忘れるべきではないと考える。

福島県の歴史を振り返ると、いつの時代も東北というより、関東との歴史的文脈で語られる部分が多いように筆者には感じられる。福島県域は「東北に飛び出した関東」、日本列島の文化の特質を模式化した藤本強氏の言葉を借りれば「東北と関東のボカシの地域」という事ができる。

筆者が学んでいる古代においても、さまざまな文化要素の中でそのような傾向が見られ、今回扱った近世初頭においても同じような傾向を示すことがわかった。福島県の地域的特性として抽出できるものと考えられる。

今回は、門外漢である筆者が幕藩体制確立期の福島県域について検討を加えたが、これまでの文書研究の成果からすると至らない点が多かったかもしれない。

考古学者として現在認識できる事象に即して遺構をはじめとする考古・歴史資料群を解釈すると、どのような福島県域の姿が導き出せるのかに挑戦したつもりである。

この時期を研究されている多くの方々からの御意見をいただきながら、さらに認識を深めていき、私が常に掲げている「福島県とは何か？」という問いの答えに近づいていきたいと思う。

多くの研究者の方々からのご批判・ご意見をお待ちしている。

最後になりましたが、本年５月に鈴木啓先生が御

逝去なされました。突然の訃報に福島県考古学会に偉大な足跡を残した「考古学界の巨人」が他界されたことを惜しむ声が至る所で聞かれた。

考古学の成果を基礎にして、歴史学・民俗学・その他の関連諸学問の成果を縦横無尽に組み合わせながら、日本の歴史上で福島県が果たしてきた役割や、その当時の県内各地の人々の暮らしの具体的な姿を明らかにしていった学問的姿勢は、まさに考古学者として、また文化財行政に携わる者として、さらに博物館人として、私の究極の目標でした。

先生の偉大な業績は枚挙に暇がありませんが、今回検討を加えた資料である近世城郭についても、先生の先導的な研究と指導がなければ、現在の水準まではたどりつけていないのは間違いない事実です。

常に県内の考古学業界をリードし、後進の道を切り開いてくださった鈴木啓先生のご冥福をお祈りするとともに、先生からこれまで受けた学恩に報うことができるように、さらに福島県が果たした歴史的価値の解明に微力ながら努めていきたいと思っています。

参考文献

飯村均　2016 「城館の考古学」まほろん指定文化財展関連シンポジウム第２回「城跡を掘るⅡ　近世城郭の展開」資料集　福島県文化財センター白河館

佐藤真由美　2016 「二本松城跡―戦国城郭から藩庁へ―」まほろん指定文化財展関連シンポジウム第２回「城跡を掘るⅡ　近世城郭の展開」資料集　福島県文化財センター白河館

白河市　2006 『白河市史２　近世　通史編２』

白河市　2013 『白河歴史の手引き　れきしら　入門編』

白河市　2015『白河歴史の手引き　れきしら　上級編』

白河市教育委員会　1997 『白河駅前地下自由通路建設関連発掘調査報告書Ⅰ小峰城跡』 白河市埋蔵文化財調査報告書第21集

白河市教育委員会　1999 『白河駅前地下自由通路建設関連発掘調査報告書Ⅱ小峰城跡』 白河市埋蔵文化財調査報告書第25集

白河市教育委員会　2000 『白河駅前地下自由通路建設関連発掘調査報告書Ⅲ小峰城跡』 白河市埋蔵文化財調査報告書第29集

鈴木啓　2002 『ふくしまの城』歴春ふくしま文庫57　歴史春秋社

鈴木一寿　2016 「白川城から小峰城へ－城・道・町の変遷－」まほろん指定文化財展関連シンポジウム第２回「城跡を掘るⅡ　近世城郭の展開」資料集　福島県文化財センター白河館

高橋充　2016 『東北の中世史５　東北近世の胎動』吉川弘文館

棚倉町　1982 『棚倉町史　第１巻』

棚倉町教育委員会　2001 『赤館跡－上代地区－国道118号線道路改良工事に伴う発掘調査』 棚倉町埋蔵文化財調査報告書11

棚倉町教育委員会　2015 『棚倉城跡Ⅱ』 棚倉町埋蔵文化財調査報告書24

棚倉町教育委員会　2017 『棚倉城跡』 棚倉町埋蔵文化財調査報告書26

二本松市　1999 『二本松市史１　通史編１』

二本松市教育委員会　1998 『二本松城跡保存管理計画報告書』

二本松市教育委員会　1992 『二本松城跡Ⅰ－平成２・３年度調査報告書－』

二本松市教育委員会　1997 『二本松城跡Ⅱ－二本松城跡本丸石垣修理・復元事業報告書－』 二本松市文化財調査報告書第13集

二本松市教育委員会　2000 『二本松城跡Ⅲ－平成10･11年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第15集

二本松市教育委員会　2001 『二本松城跡Ⅳ－平成12年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第17集

二本松市教育委員会　2002 『二本松城跡Ⅴ－平成13年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第21集

二本松市教育委員会　2003 『二本松城跡Ⅵ－平成14年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第21集

二本松市教育委員会　2004 『二本松城跡Ⅶ－平成15年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第26集

二本松市教育委員会　2005 『二本松城跡Ⅷ－平成16年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第28集

二本松市教育委員会　2006 『二本松城跡Ⅸ－平成17年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第31集

二本松市教育委員会　2007 『二本松城跡Ⅹ－平成18年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第33集

二本松市教育委員会　2008 『二本松城跡ⅩⅠ－平成19年度発掘調査報告書－』 二本松市文化財調査報告書第35集

二本松市教育委員会　2009 『二本松城跡ⅩⅡ－平

成20年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第38集
二本松市教育委員会　2010　『二本松城跡ⅩⅢ－平成21年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第40集
二本松市教育委員会　2011　『二本松城跡ⅩⅣ－平成22年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第42集
二本松市教育委員会　2012　『二本松城跡ⅩⅤ－平成23年度発掘調査報告書1－』　二本松市文化財調査報告書第44集
二本松市教育委員会　2012　『二本松城跡ⅩⅥ－平成23年度発掘調査報告書2－』　二本松市文化財調査報告書第45集
二本松市教育委員会　2013　『二本松城跡ⅩⅧ－平成24年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第48集
二本松市教育委員会　2013　『二本松城跡ⅩⅨ－平成24年度災害復旧事業報告書－』　二本松市文化財調査報告書第49集
二本松市教育委員会　2014　『二本松城跡20－平成25年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第53集
二本松市教育委員会　2015　『二本松城跡21－平成25年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第54集
二本松市教育委員会　2015　『二本松城跡22－平成25年度災害復旧事業報告書－』　二本松市文化財調査報告書第55集
二本松市教育委員会　2016　『二本松城跡23－平成26年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第57集
二本松市教育委員会　2017　『二本松城跡24－平成27年度発掘調査報告書－』　二本松市文化財調査報告書第60集
二本松市教育委員会　2018　『二本松城跡25－平成28年度発掘調査報告書1－』　二本松市文化財調査報告書第62集
二本松市教育委員会　2018　『二本松城跡26－平成28年度発掘調査報告書2－』　二本松市文化財調査報告書第63集
平田禎文　2016　「城と城下町の近世への展開」まほろん指定文化財展関連シンポジウム第２回「城跡を掘るⅡ　近世城郭の展開」資料集　福島県文化財センター白河館
福島県　1970　『福島県史３　近世２』
福島県　1971　『福島県史２　近世１』
福島県立博物館　1988　『江戸時代の流通路　ふくしま－米のゆき道・塩のくる道』企画展図録
藤田直一　2016　「棚倉城跡―赤舘城から棚倉城への機能移転」まほろん指定文化財展関連シンポジウム第２回「城跡を掘るⅡ　近世城郭の展開」資料集　福島県文化財センター白河館
三春町歴史民俗資料館　2004　『三春城と仙道の城』三春城築城500年・平成16年度春季特別展図録

図版出典

図１・2・3・4・5・14・16・31　福島県立博物館1988を一部改変
図6・8・10・11・13　福島県1971を一部改変
図7・9・12・18　　自作
図15・17・23・27　三春町歴史民俗資料館2004を一部改変
図19・20・21・22　棚倉町教育委員会2017を一部改変
図24・25・26　白河市2013を一部改変
図28　佐藤真由美2016を一部改変
図29・30　二本松市教育委員会1998を一部改変